



HIROTTA KOINU
GA KERUBEROSU DESHITA

拾った子犬が ケルベロス でした

～実は古代魔法の使い手だった少年、

本気出すとコワイ(?)愛犬と

楽しく暮らします～

vol. **2**

Arai Ryoma
荒井竜馬

主な登場人物

..カイン..

『悪魔教』の代表者。
闇の技術の研究者でもある。

..シーダ..

ラエドの街の教会で働く
シスター。

..ソータ..

失われた『古代魔法』の使い手の
少年。現代魔法よりも高度な
理論で、魔法を自在に操る。

..ベーカー..

素行の悪さが問題視されて追放
された元冒険者。現在は『悪魔教』
の幹部。

..ミルド..

『魔導士の集い』のリーダー。
エリート魔法学校の学生でも
ある。

..サラ..

剣のみで戦う『純剣士』の女性。
魔法が使えないことを負い目
に感じている。

..ケル..

地獄の番犬ケルベロス。
見た目は可愛い子犬だがなが
なか武闘派。時折その残虐性
が垣間見えることも……

1 過去の記憶は悪夢で

「おい！ もっとしっかりしろ、時代遅れ！」

「そうよ！ 魔法も使えないんだから、せめて私たちの盾くらいにはなりなさいよ！」

「お前が戦えているのは、俺の支援魔法のおかげだからな！ 分かったら、さっさと退け！ 魔法を一切使えない劣等種が!!」

私——魔法が使えない『純剣士』のサラは、後ろで控えるパーティメンバーから、そんな心ない言葉を浴びせられていた。

私は魔物との連戦でボロボロの体に鞭打って、目の前にいるワニに似た大型の魔物——ハイアリゲイツの気を引きつけていた。

私の消耗は激しいが、どうやら相手も同じらしい。魔物は息も上がっているし、ずいぶんと余裕がないように見える。

——太刀入れられれば勝てそうだ。

この間合いなら、いける。

「サラ！ 良いとこ取りはやめろよ！」

私が脚に力を入れて踏み込もうとした瞬間、後ろからそんな言葉が聞こえてきた。私はハッとしてパーティメンバーの方を振り向く。

すると、彼らは私を見下すようにしながら、また私のことを罵倒していた。私は下唇を軽く噛んでぐっと堪える。

……そうだった。私が敵を倒したら、また彼らの機嫌を損ねてしまう。

私はそう考えて、構えていた剣を軽く下げた。

彼らは前衛職を見下し、魔法使いこそ高貴な存在だと考えている。

だから、魔法が使えない私が彼らよりも目立つと、後でぐちぐちと言われてしまうのだ。

私はそんな戦闘に歯がゆさを感じていた。

しかし戦闘ではまるで役に立たなくても、依頼内容によっては彼らの魔法が必要になる場面はある。そしてそれは、私がどんなに努力しても会得できない技術だった。魔法を使えない私がパーティに所属せずに単独で冒険者として活動するのは、あまりにデメリットが大きすぎる。まして私のような剣士を拾ってくれるパーティなんてないのだから、多少の不満があっても我慢しなければならない。

よって、私は彼らの魔法でも倒せるくらいまで魔物を弱らせて、トドメを譲る。

しかし、彼らがすぐに魔物を倒せることはめったにない。

結果として、私はいつも戦いの中で長時間の防戦を強いられることになる。

……さすがに骨が折れるんだよね。

不満を覚えながらも、私は踏み込もうとした足を一歩引いて、防御に徹することにした。

しかし、どれだけ待っても決定打になる魔法はなかなか来ず、今日もいつもの消耗戦になっていた。

「はあ、はあ」

頬を伝う汗を拭って、息を整える。

すると、また後ろから大きな声が聞こえてきた。

「おい、サラ！　なんで俺の支援魔法を受けて息を切らしてんだよ！　もっとシャンとしろ!!」
パーティリーダーのミルドの怒声が飛んでくるが、私は聞こえないふりをして、ため息を漏らした。

確かに、今は彼に支援魔法をかけてもらっている状態ではある。

それでも、自分の動きが劇的に変わっているような感覚はなかった。

ないよりはマシってくらいかな？

しかし、そんなことを知らないミルドは声高に続ける。

「俺の支援魔法がなければ、お前は何もできないんだからな!!　俺に感謝しろ！」

私は思わずミルドに反論しそうになったが、その言葉を静かに呑み込んだ。

私がどれだけ魔物を倒しても、魔物の攻撃からパーティメンバーを守っても、その称賛は私ではなく、私に支援魔法をかけているミルドにおくられてきた。

だからこういった言葉にも慣れたものだった。

そこで、パーティメンバーのランが私を呼んだ。

「サラ！ 早くそいつをあつちに引き寄せなさい！ こっちの準備はできたんだから、ぐずぐずしないでよ！」

振り返ってランが指さす方を確認すると、地面に新たな魔法陣が描かれていた。

そして、その周辺には高価な魔石が置かれている。

……これで今日三度目か。

少し離れた所には、黒焦げになった地面が二箇所あった。

それらは、ランが二度魔法を撃って、二回とも外した跡だった。

私は彼女の魔法に巻き込まれて焦げた服をちらっと見る。

今度は巻き添えを食らわなければいいんだけどね。

「サラ！ ぼさつとしないで！」

私はランに急かされながら、魔法陣へと魔物をおびき寄せる。

少しの攻防の末、無事に魔物を指定の場所に移動させることに成功した。

「ガアア!!」

「くっ！」

私はハイアリゲイツの攻撃を弾いて隙を作ってから、パーティメンバーにバレないように魔物にダメージを与えた。極力魔物を弱らせておかないと、ランの魔法で倒せない可能性があるからだ。

「ガ、ガア！」

魔物がよろけた瞬間、私は魔法陣から素早く離れようとしたが——それよりも早く魔石が光を帯びはじめた。

まずい、今すぐ飛び退かないと！

「いくわよ！ 『魔誘爆』——！」

ランの声が聞こえた次の瞬間、いくつかの爆発の音が響き、衝撃で体が吹っ飛ばされた。私は体を地面に打ち付けてから、さっきまで自分がいた場所を振り向く。

すると、そこには焦げた地面と倒れている魔物の姿があった。

どうやら、今度はランの魔法が成功したらしい。

「う……ぐっ」

私は熱を持って痛む背中を手で押さえた。

顔を歪ませながらパーティメンバーを見ると、彼らは満足げな笑みを浮かべてハイタッチを交わしていた。

「さすがだな、ラン！ 魔物ももう動けないみたいだ」

「まあね、私にかかればこんなものよ」

パーティのもう一人の魔法使い、ギークに褒められたランは、胸を張って自慢げに笑う。

「俺の支援魔法でボンコツを動く盾にしているんだからな。そのことを忘れるなよ、二人とも」

ミルドは咳払いをしてそう言いつつ、眼鏡の縁をくいつと持ち上げた。

彼が自慢げに笑う声を聞きながら、私は俯く。

正直、色々と言いたいことはある。

それでも、下手に彼らの機嫌を損ねてパーティを追いつ出されたらと思うと、私は口をつぐむしかなかった。

だから、何を言われても我慢するしかない。

私はそう考えて、パーティメンバーに気づかれないように歯を食いしばるのだった。



——活動拠点にしているタウロの街に戻った翌日。

「サラ、お前をパーティから追放する」

「え？」

冒険者ギルドに呼ばれた私は、ミルドから突然そう告げられた。

ミルドたちのパーティは、冒険者ギルドからパーティランクの昇格試験を受けてほしいと言っていた。

魔法を使えず、時代遅れと蔑まれる純剣士の私が、ついにB級パーティの一員になれるかもしれない。

今まで理不尽な指示や罵倒に耐えてきたのが、これでようやく報われる。

そう思っていたのだが……結果はこれだ。

私がしばらく言葉を失っていると、ミルドは眼鏡の縁をくいつと上げる。

「正直、前衛職なんてどんな奴でもいい。貴様のような純剣士以外ならな」

そして、ミルドに続く形でランとギークが私を馬鹿にしたように笑う。

「足手まといを連れて試験を受けるわけにはいかないでしょ？」

「ちよこちよこ動かれても邪魔なだけだ。今度はもっと肉壁になるような、タフな前衛を入れよう」

三人はそう言いつつ、私の返事を待たずに離れていった。

席に戻って楽しそうに話す三人の声を聞きながら、私は顔を伏せて小さく呟く。

「……分かったよ」

これで何度目の追放だろうか？

そんなことを考えながら、私はふらふらと街を歩いていった。



気がつく、いつの間にか私は街の旧訓練場に来ていた。

新しい訓練場ができて、メンテナンスされなくなったボロボロの旧訓練場は、今の私の心と似ているような気がした。

「——」

私はあらゆる感情を抑え込んで、剣を引き抜いた。

そして、いつもよりも力任せに素振りをした。

一心不乱に剣を振っているこの時間だけは、嫌なことを忘れられる。

……純剣士の私に居場所なんてあるのだろうか？

そんな考えをかき消すために、私は今日も旧訓練場で剣を振るのだった。



目を覚ますと、そこはベッドの上だった。

私は額にじんできた汗を拭って、数度まばたきする。

「夢、か」

体を起こしてみると、寝巻が汗でぐっしりと濡れていたことに気がついた。
寝起きだというのに、鼓動がやけに速い。

「……朝から嫌な夢を見たね」

私は苦笑いをしながら独り言を漏らす。

あまり思い出したくない過去だ。

「おっと、そうだった。今日は新しい依頼を受けるんだった」

私はわざとらしく独り言を呟いて嫌な夢を忘れようとする。

ぐぐっと伸びを一つしてから、私は慌ただしく朝の支度を始めるのだった。



所属していたSランクパーティ『黒龍の牙』に裏切られ、崖から突き落とされた俺——ソータは、崖下で不思議な子犬のケルと出会った。

自称『地獄の門番』ケルベロスだというケルによると、どうやら俺は失われた『古代魔法』の使い手だったらしい。

ケルの助けもあって無事に生還した俺は、『黒龍の牙』とダンジョン攻略対決をして、彼らに罪を認めさせた。

裏切られたことはショックだったけれど、パーティリーダーのオリバは素行の悪さで有名だったし、良い機会だったと思う。

そんな俺は、純剣士のサラさんと正式にパーティを組んで、冒険者として再出発したところだ。

サラさんと共にタウロの街の冒険者ギルドを訪れた俺は、ギルドの受付職員のエリさんに依頼を紹介してもらっていた。

「ハイアリゲイツの討伐ですか？」

エリさんはカウンターにゴロンと横になったケルを撫でながら、依頼内容を説明する。

「はい。先日ハイアリゲイツに家畜を丸呑みされたという被害がありまして、早急に対処してほしいと冒険者ギルドに依頼が来ているんです」

俺は気持ちよさそうに撫でられているケルを見ながら、ハイアリゲイツという魔物について思い出す。

ハイアリゲイツは成人男性の二回りくらい大きなワニ型の魔物で、凶暴な性格をしている。

川辺に棲息しているため、街に被害が出たという話は聞かないが、定期的に家畜や冒険者が襲われて被害が出るのだ。

「うん。C級の俺たちには、ちょうどいいかもしれませんね」

ハイアリゲイツの強さから考えると、この依頼はC級パーティが対応するのが妥当といったところだろう。

「いえ、それが……普通のハイアリゲイツではないみたいなんです」

エリさんはケルを撫でるのをやめて眉尻を下げた。それから真剣な表情で続ける。

「他のC級パーティに依頼をしたのですが、そのパーティは『ハイアリゲイツにしてはでかすぎる!』と言って、遠くからハイアリゲイツを見るなり帰ってきちゃったんですよ」

「そんなにでかかったんですか?」

俺の問いに、エリさんが頷く。

「ええ。それに、妙に殺気立っていたとも言っていましたね」

「殺気立っていた、ですか」

ハイアリゲイツは縄張り意識が強い。でも、常に殺気立っているような魔物ではない気がする。すると、そこまで話を聞いていただけのケルがすくっと体を起こし、機嫌よく尻尾をふりふりと振る。

「ふむ。普通のC級パーティでは対処できない魔物ということか」

「そうなんです。だから、ソータさんたちのパーティにお任せできないかと思ひまして」

「フフツ、ワニ如きが調子に乗っているのか。軽く捻じ潰してくれよう。あんなのは大きなトカゲと大差ない」

ケルは余裕の表情でぐっと伸びをしていた。

いや、さすがに大きなトカゲとワニは別物だと思うけど……でも、ケルからしたら本当に大差ないのかもしれない。

俺はケルの言葉に少し笑いながら頷いた。

「そういうことでしたらその依頼、受けさせてください。ケルもサラさんもいますし、なんとかなると思います」

古代魔法の使い手と純剣士とケルベロス。

そんな異色のパーティである俺たちなら、普通のC級パーティがびびってしまった魔物でも倒せるんじゃないかと思う。

「サラさんもいいですよね? あれ……サラさん?」

見ると、サラさんは依頼書に目を落として固まっていた。

普段あまり見せない硬い表情だったので、俺は不思議に思っただけ目をぱちぱちとさせる。

「……サラさん?」

「え? ど、どうしたのかな?」

「えっと、この依頼を受けようと思うんですけど、いいですかね?」

「もちろん。いいと思うよ」

俺が遠慮がちに聞くと、サラさんはぎこちない笑みを浮かべた。

彼女の様子がいつもと違うので、俺は微かに眉をひそめた。

依頼書の内容がマズかったのかな?

そう考えて依頼書をよく読んでみたが、特に変なことが書いてあるようには思えない。うーん、何か重大な見落としがあるのだろうか?

俺がしばらくの間じつと依頼書を見ていると、エリさんが不思議そうに首を傾^{かし}げた。

「ソータくん。何か気になる点とかありましたか？」

「いえ、特にはないんですけど……」

俺はそう言いながら、サラさんをちらつと見る。

すると、俺と目が合ったサラさんは意外そうな顔をしてから小さく笑った。

「ソータ。もしかして、私のことを気にしてくれているの？」

「えっと、はい。依頼の話をしてから、サラさんの表情が硬くなった気がしたので」

頬を掻^かきながらそう言うと、サラさんは優しい表情で俺を見る。

「別に依頼内容が嫌とかではないよ。ただ、少し前に戦ったことのある魔物だと思ったただけだよ」

「少し前……なるほど」

サラさんの言葉を聞いて、俺は察してしまった。

多分、彼女が前に所属していたC級パーティで受けた依頼なのだろう。

以前サラさんから、前にいたパーティでの純剣士の扱いについて聞いたことがあった。

確か、魔法を使えないという理由で見下され続けてきたと言っていた。

きっと昔のパーティで受けた扱いを思い出して、表情を硬くしたのだろう。

俺も『黒龍の牙』では酷^{ひど}い扱いを受けてきたので、サラさんの気持ちが少し分かってしまう。

「それなら、この依頼を受けるのはやめましょう」

他にいくらでも依頼はあるわけだし、この依頼にこだわる理由はない。

何より、嫌なことを思い出す魔物を相手にする必要はないだろう。

俺がそう提案すると、サラさんは小さく首を横に振った。

「いいや、この依頼で問題ないよ。むしろ、ソータたちとこの依頼をやってみたい」

「俺たちと、ですか？」

「ああ。今のパーティで戦ったらどれだけ楽に倒せるのか、気になってね」

サラさんはそう言うと、得意げな笑みを浮かべる。

俺はその表情を見て、彼女が無理をして言っているのではないと思った。

むしろ言葉通り、チャレンジしたくてうずうずしているようにも見える。

「古代魔法の使い手と純剣士。ソータとサラが組めば、当時サラがいたパーティとは比べ物にならないだろうな」

ケルはニパツと口もとを歪めると、カウンターから下りて早く行こうと急かしてくる。

俺はそんなケルとサラさんを見て頷いた。

「分かりました。エリさん。そういうことなので、その依頼を俺たちに受けさせてください」

「それでは、よろしく願いますね」

俺はエリさんから受け取った依頼書にサインをして、さっそくハイアリゲイツの討伐に向かった。

2 ハイアリゲイツの亜種？

ハイアリゲイツの目撃情報があった場所は、近くの森を抜けた先にある大きな川だった。

俺たちは馬車で森の入り口まで行つた後、歩いてその川まで向かうことにした。

その道中、俺はサラさんから意外な話を聞かされた。

「え!? サラさんの前のパーティって、サラさん以外全員魔法使いだったんですか？」

前に所属していたパーティでハイアリゲイツを倒したと聞いたので、参考までにどんな構成のパーティだったのか聞いてみたのだが、予想外の答えが返ってきた。

俺が目を見開いていると、サラさんはくすくす笑ってから続ける。

「そうなんだよ。変わった構成だよ。私が魔物を倒しすぎると他のメンバーが不機嫌になるから、力加減が大変だったかな」

「え？ 倒しすぎると機嫌が悪くなるって、どういうことですか？」

俺は一瞬サラさんの言葉の意味が分からず、首を傾げた。

すると、彼女は笑みを浮かべたまま少し眉をひそめる。

「私が魔物を倒しちゃうと、彼らは手柄を横取りされたって思うみたいだね」

それから、サラさんは元いたパーティ『魔導士の集い』のことを少しだけ話してくれた。

サラさんの話によると、彼女は魔物からパーティメンバーを守る役割をたった一人で負わされていたらしい。

しかも、どれだけ魔物たちからパーティメンバーを守っても、その働きを称賛されることなくむしろ「もつとちゃんと動け」と罵声を浴びせられていたという。

……なんかサラさんって、俺とよく似た境遇にいたのかもしれない。

「サラさんも色々大変だったんですね」

「ふむ。ずいぶん愚かな人間がいたものだ」

サラさんの話を聞いた俺とケルは、そんな感想を漏らした。

純剣士の扱いが酷いということは知っていたが、ここまでだとは思わなかった。

というか、パーティメンバーに恵まれなさすぎじゃないだろうか？

まあ、俺も殺されかけたんだから、人のことは言えないかもしれないけど。

俺がそう考えていると、ケルが何か思いついたのか、尻尾をピンと立てた。そしてサラさんの隣に並ぶと、上機嫌にその尻尾を振る。

「サラよ。その愚か者たちは、今どうしているんだ？」

「うーん、どうしているんだろうね。あれ？ そういえば、パーティを追放されてから、冒険者ギ

ルドでも見たことがないかも」

「む……先に野垂れ死なれてしまったか」

ケルはなぜか、がっくりと肩を落とした。

うん。なんとなくケルが何を考えていたか分かってしまった。

多分、俺がオリバたちを見返したように、『魔導士の集い』のメンバーにも同じことをしてやりたいと思ったのだろう。

——サラさんの本当の実力を教えて、そのパーティの奴らを見返してやりたい。

彼女の話聞いてそう思ってしまうのは、当然な気がした。

俺もサラさんにはオリバに絡まれたときに手伝ってもらったから、恩返しの意味を込めて、彼女の元パーティメンバーを見返したいと思う。

でも、そのパーティがどこにいいのか分からないなら、どうしようもないか。

そんなことを考えながら森を進んでいると——ケルがぴたりと足を止めた。

「ソータよ」

「うん。魔物の気配があるね」

『魔力探知』に反応があった方を確認しながら、俺は小さく頷く。

俺たちの会話を聞いて、サラさんが警戒するように剣を鞘から引き抜いた。

「そろそろ川が近いから、ハイアリゲイツかもね。ソータ、どっちの方角だい？」

「あつちですね。まだ目視では確認できない距離です」

俺はサラさんを先導しながら、ケルと共に森の中をゆくりと移動していった。

しばらく歩いた先に、『魔力探知』に反応していた魔物を見つけた。

しかし、その姿を見たサラさんと俺は、思わず自分の目を疑ってしまった。

「……ソータ。あれ、かなりでかくないかい？」

「……ですね。本当にハイアリゲイツなんですかね？」

目の前にいる個体は、普通のハイアリゲイツより一回り以上大きな体をしていた。

軽く触れるだけで痛そうな荒々しい鱗と、膨れ上がったように発達している筋肉。そして、鎧を貫通しそうなほど鋭い牙を持っている。

俺の知っているハイアリゲイツとは結構違っていて、普通の個体よりも全体的にごつくて強そうだ。

「ずいぶんと気性が荒いな」

ケルはハイアリゲイツを観察してそんな言葉を漏らした。

目の前にいるハイアリゲイツは、鼻息を荒くしながら落ち着きなく辺りをウロウロしている。

俺たちに気づいて警戒しているというよりも、ただ興奮している状態に見える。

確かに、こんな奴を前にしたら、普通のC級パーティなら逃げ出すだろう。

俺は目をギラつかせるハイアリゲイツを見ながら、腕を組んで考える。

「でも、俺たちならなんとかなりそうですね」

「……うん、そうだね」

サラさんはわずかに目を細めてから、言葉を続ける。

「どうしようか。前にワイバーンと戦ったときみたいな作戦でいくかい？」

俺たちは以前、オリバのパーティとダンジョンで対決した際に、ダンジョンのボスであるワイバーンと戦っている。

確かあのときは、ケルがワイバーンを引きつけてくれて、俺が魔法を発動する準備を終えるまでの間、サラさんが攻撃から守ってくれたんだっけ？

その作戦でうまくいったから、今回も同じ戦い方がいいかもしれないな。

「はい。それでいきましょう」

森に入ったときにすでに支援魔法はかけてあるから、このまま戦闘になっても問題はない。

俺が二人にそのことを告げると、ケルが一步前に出た。

「ふむ。ソータの支援魔法もあるのなら、我が本気になる必要はないな。どれ、足止めでもしてくるか」

ケルは遠くにいるハイアリゲイツの方を見ると、そのまま可愛らしくトテツと小走りに向かっていった。

「ガアアアア!!」

すると、ケルの接近に気づいたハイアリゲイツがぐると体を回転させて、突進してきた。

しかしケルはひよいと体を捻り、その攻撃を難なくかわしてみせる。

「ガア!？」

「何も驚くことはあるまい。貴様が相手にしているのは、地獄の門番のケルベロスだ。実力が違いくすぎるのだからな」

ケルはそう言うのと、襲いかかるうとするハイアリゲイツの頭をバカンツと叩いた。

「ガアアア!」

叩かれた勢いで、ハイアリゲイツは地面に顔を強打する。さらにバウンドした顔がちようどケルの目の前にきた。

「フフフツ、叩いてもすぐに頭が上がってくるから面白いな」

ケルはそう言いながら楽しそうにハイアリゲイツの頭を何度も叩いてバウンドさせる。

繰り返し頭を殴られたハイアリゲイツはどうとう目を回して、頭をくらくらとさせていた。

あまりに一方的な戦いを見せられて、俺とサラさんは少しの間言葉を失う。

「……………圧倒的だね」

「……なんか、そういうゲームみたいに見えてきましたよ」

完全に弄ばれているハイアリゲイツの姿を見て、少しだけ哀れだなど思ってしまった。

——おっと、そうだった。

見ているだけじゃなくて、俺も魔法の準備をしないと。
あの巨体で暴れられると面倒だから、とりあえずは拘束魔法かな。
俺はそんなことを考えながら、地面に手をつける。

しかしそこで、一方的にやられていたハイアリゲイツが、今までと違う暴れ方をした。バタバタと地面をのたうって、一気に土煙が舞い上がる。

「ガアアア!!」

「むっ、土煙か。面倒くさい」

ハイアリゲイツとケルの姿が見えなくなった。目くらましのつもりなのだろう。

まあ、『魔力探知』で捉えているから、だいたいの動きは分かるんだけどね。

「サラ！ そっちに行つたぞ！」

「了解」

ケルの警告に反応して、サラさんはハイアリゲイツが向かってくる方に剣を向けた。

うるさいくらいの足音を聞けば、『魔力探知』がなくても居場所を突き止めるのは難しくない。

「ガアアア!!」

土煙の奥から姿を現したハイアリゲイツに対し、サラさんは一歩踏み込む。

「ソータ、少しでも前に出てくるね」

サラさんは強く地面を蹴ると、一瞬にしてハイアリゲイツとの距離を詰めた。そして流れるよう

な太刀筋で何度も剣を振るう。

「『二の型、蓮華』！」

「ガアアア!!」

サラさんの剣技をもろに食らったハイアリゲイツは、悲鳴を上げて顔を歪ませた。

ケルの打撃のダメージも蓄積していたせいか、ハイアリゲイツは立っているのもままならない様子だ。

これだけフラフラなら、拘束魔法は必要なさそうだけど……

「念のため、『黒影鞭』」

圧縮率を調整した『黒影鞭』を使うと、黒い鞭と化した魔力が地面から勢いよく出て、ハイアリゲイツの体に巻き付いた。

「ガア、ア……」

身動きが取れなくなつたハイアリゲイツを確認した俺は、次の魔法の準備をする。

次に使う魔法は『火球』だ。

地面に手をついたまま、頭の中で三つの『火球』を重ねるイメージを膨らませる。

……きた。

魔法が重なった感覚があったところで、俺はサラさんに合図を送る。

「サラさん！」

サラさんがハイアリゲイツから十分な距離を取ったのを確認してから、俺は地面についた手にくつと力を込める。

『『火球』！』

地面を通じて魔法の発動位置を移動させ、その発射口をきゅつと絞る。

次の瞬間、赤く染まった地面から勢いよく噴き出た炎が、ハイアリゲイツの体を貫いた。

「ガアアアア!!」

ハイアリゲイツが大きな断末魔だんまつまの叫びさけを上げる。やがて炎が落ち着くと、そのまま倒れて動かなくなった。

「これで討伐完了ですね」

俺が小さく息を吐いてそう言くと、ケルが子犬のような息遣いをしながら戻ってきた。

「さすが、ソータだ。一撃でハイアリゲイツを仕留めるとは」

「それを言うなら、ケルとサラさんの方だよ。最後の俺の魔法はオーバークイル感があったし」

念のためにも思っおもてて古代魔法を重ねがけして撃ったけど、多分そこまでしなくても倒せていたと思う。

あれだけの打撃と斬撃を受けた後だったわけだし、もう少し手を抜いても良かったかもしれない。

「まさか、こんなにあつさり倒れるとはね。前にハイアリゲイツと戦ったときとは大違いだよ」

サラさんは倒れているハイアリゲイツを見て、感慨深そうにそう言った。

その表情には、冒険者ギルドで見せたような硬さはなかった。

この依頼を受けて正解だったかもしれない。

俺はいつもの調子を取り戻したサラさんを見て、そんなことを思うのだった。

3 再会は突然に

ハイアリゲイツの討伐を完了した俺たちは、その報告のために冒険者ギルドに戻っていた。

エリさんの姿が見えたが、どうやら他の冒険者の対応中らしい。

まあ、達成報告をするだけなら、エリさんじゃなくてもいいか。

そう考えて空いている窓口に向かおうとすると、カウンターを叩く大きな音がギルド内に響いた。「だから、何度も言わせるな！ 依頼を失敗したのは、前衛が雑魚^{ざご}すぎたからだと言っているだろ！」

あれ？ 何か揉めてる？

見ると、エリさんのカウンターで三人の冒険者が声を荒らげていた。

カウンターに身を乗り出してエリさんに文句を言う三人を見ると、サラさんが何かに気づいたように声を漏らした。

「あっ……」

「サラさん？」

俺が声をかけると、サラさんは目を逸^そらして気まずそうに頬を掻く。

「あそこにいる冒険者たち、私の元パーティーメンバーみたい」

「え？ そうなんですか？」

あれがサラさんがいたというパーティ、『魔導士の集い』か。

そのメンバーは、眼鏡をかけたやたら偉そうな男と、男受けがよさそうな女性、それからヒョロくて長身の男だった。

すると、俺の隣にいるケルがばあつと顔を輝かせた。

「ほほう。あれがサラの実力に気づかなかった愚かな人間たちか」

ケルは耳をピンと立てて、彼らの話を聞くことに集中していた。

それにしても、ずいぶんキレ散らかしているみたいだ。

普通、冒険者ギルドの職員とあんなに揉めることはない。一体、彼らは何が気に食わなかったのだろう。

不思議に思った俺は、ケルと同じく彼らの話を傾けることにした。

「前衛のせいと言われましても……確か、以前も同じようなことを言っていないでしたか？」

エリさんがそう指摘すると、眼鏡の男が肩をすくめた。

「まともな前衛職がいらないんだから、同じ結果になるのは当然だろ？」

女のメンバーと痩^やせた男も、続けてエリさんに文句を言う。

「なんでそんなことも分らないの？ あんた、最終学歴大したとこじゃないでしょ？ ギークもなんか言ってるよ」

「ミルド、ラン、こいつとまともな会話するのは無理だろう。論理的な話が理解できない奴だからな」

そう言ってる三人はエリさんを馬鹿にするように笑う。

そのあとも、彼らは必要以上に頭の良さや学歴の違いなどを強調した。

エリさんもさすがに頭にきているように見えたが、営業スマイルを絶やすことはなかった。

さすが、エリさん……いや、よく見ると口元がピクピクしてるかも。

理不尽なことを色々と言われながらも、彼女は対応を続ける。

「それで、ミルドさんたちが弱いと言っている前衛職の方はどちらに？」

「ふんっ、どこかに行つたさ。そもそも、前衛職なんて脳筋のうきんな奴と一緒にいると、こっちの頭まで悪くなるだろ。長時間一緒にいるなんてごめんだ」

眼鏡をかけているミルドと呼ばれた男は、そう言いながらバンバンと何度かカウンターを叩いた。「とにかく、まともな前衛がいらないこのギルドの現状をどうにかしろ。そうじゃないと、パーティランクの昇格試験なんか達成できないからな！」

「そうよ！ まともな前衛の用意くらいしなさいよ！」

「職務怠慢しよくむたいまんだぞ。いい加減にしてほしいんだが？」

そして、ミルドに続く形でランという女性と、ギークと呼ばれていた男が言う。

……ずいぶんと無理な注文をしているなあ。

というか、このギルドにまともな前衛がいらないなんてことはないと思うんだけど。

ちらつと周りを見ると、屈強くつきやうな前衛職と思われる人たちがミルドたちを睨にらんでいた。

今にも飛びかかりそうな前衛職の人たちを見て、俺は顔を引きつらせる。

まあ、ギルド内のみんなに聞こえるくらいの大声で馬鹿にされれば、さすがに怒るよね。

しかし、ミルドたちは自分たちが睨にらまれていることにまるで気づいていないようだ。

どうやら、周りがあまり見えない人たちらしい。

「あれ？ まだ昇格試験中なの？」

俺の隣にいたサラさんが、意外そうに呟いた。

昇格試験というのは、パーティのランクを上げる際に行うもので、ギルドから指定された依頼の達成が合格条件になっている。

一定の成果を挙げたパーティなら、試験を受けること自体はそこまで珍しくない。

だから、サラさんが驚いているのはそこではないのだろう。

「『まだ』ってどういうことですか？」

俺が引つかった部分を聞くと、サラさんは声のボリュームを抑えて俺に耳打ちをする。

「彼らは私をパーティから追放するときに、昇格試験を受けると言っていたんだよ。だから、もう

試験は突破していると思っていたんだけど……」

「あー、なるほど」

色々と察してしまった。

ケルはにっと笑いながら俺に頷く。

「サラを追放したせいで、昇格試験に何度も落ちているのだろうな」

ケルはそう言うのと、トテテツとエリさんがいるカウンターの方向に向かっていった。

そして、リズミカルに尻尾を振りながら、軽やかにカウンターに飛び乗る。

傍から見たら子犬がはしゃいでるだけに見えるが、ケルのことを知っている俺からしたら、そんな可愛いものではない。

……あれは愚かな人間を見つけて喜んでる顔だ。

「とにかくだ！ 今回の依頼の失敗は冒険者ギルドが悪い。俺たちのレベルについてこられるだけの前衛職を用意していなかったんだからな！」

「いえ、さすがにそれは……あれ!? ケルさん？」

「ん？ なんだこの犬ところは？」

何食わぬ顔で依頼書を覗き込んでいたケルに気づき、エリさんとミルドが声を上げた。

「どんな依頼なのかと思ったら、大した依頼ではないではないか」

ケルはちらっとミルドを見てから、当たり前のようにそう言った。

「なっ!? 馬鹿にしているのか、犬の分際で!!」

激昂したミルドがケルを怒鳴りつけた。

後ろに控えるランとギークは、突然現れたケルに対して戸惑っている。

「え、なんで犬が喋ってんの？」

「使役された魔物なんじゃないか？ いや、こんな子犬みたいな魔物を使役するメリットがないか」

ケルはそんな二人のやり取りを見てから、残念がるように頭を少し下げる。

「そうか。貴様らのような、なんちゃって魔法使いではどうにもならんか」

反省しているような口調だが、確実に相手を煽る言葉だ。

青筋を立てる三人にはお構いなしといった態度で、ケルはエリさんを見る。

「それなら、我らが愚かな人間たちに代わり、この依頼を受けてやろう」

「……っ!! 舐めてんのか、このクソ犬！ おい、この犬の飼い主は誰だ!？」

ミルドはぶるぶると怒りで震えながら、俺たちの方を振り向いて怒鳴り声を上げた。

その瞬間、ケルの顔がぱあっと明るくなった。

……そうだよ。ただケルが煽るだけで終わるわけじゃないよね。きつと、この後の流れも、彼の計画通りなのだろう。

そう考えながらも、俺は微かに口元を緩めてしまった。

ミルドたちがサラさんを馬鹿にしてきたことは許せないし、見返せるのなら見返したい。オリバたちのときは手伝ってもらったんだから、今回は俺がサラさんを手伝う番だ。

「えっと、俺です」

俺が片手を挙げて名乗り出ると、ミルドは鼻で笑った。

「はん！ ただのガキじゃねーか。クソ犬とガキの二人で、この依頼をやるうっていうのか？」

「所詮は、前衛職みたいな低能の考えることね。力量が分かってないのかしら？」

「考えが浅すぎて話にならない。これだから、馬鹿は嫌なんだ」

ランとギークがわざとらしく肩をすくめて、人を馬鹿にするようなジェスチャーをする。

彼らの態度に呆れていると、いつの間にかサラさんが俺の隣に並んでいた。

「二人じゃないよ。私もいる」

サラさんはそう言うのと、いつもの凛とした様子でミルドたちを見た。

追放されたパーティを前にしているはずなのに、その顔は堂々としていて、今朝のような表情の

硬さもない。

そういえば、以前のパーティではハイアリゲイツの討伐に苦戦したと言っていた。

それに対して、今日の討伐は案外あっさり終えることができたと思う。

もしかしたら、今回のハイアリゲイツの討伐がサラさんの自信に結び付いたのかもしれない。

俺がそう考えていると……

「サラ？」

ミルドが眉間に皺を寄せて難しそうな顔をした。

しかし、それも一瞬のことで、彼はサラさんを指さして嘖き出した。

「くくっ！ なに一人前面してんだ、お前。お前なんて、くくっ……い、いてもいなくても変わらないだろうが」

「ああははっ！ サラってば、冒険者やめて子供のお守りしてるの？ よかったわね、魔法を使わ

なくてもいい仕事に就けて！」

「ははははっ！ 子犬とガキと純剣士って、三人集めても一人分の戦力にもならんなあ！」

ミルド、ラン、ギークは口々にサラさんを侮辱する。俺たちを指さしながら、お腹を押さえてゲラゲラと笑っている。

しかし、エリさんというと、期待の眼差しでこちらを見ていた。

「本当ですか!? ソータくんたちのパーティが依頼を受けてくれるなら助かります！」

「「え？」」

心の底から喜ぶようなエリさんの言葉を聞いて、三人はぴたっと笑うのをやめた。

それから、信じられないという目を向けるが、エリさんはそれをスルーして続ける。

「じゃあ、この依頼はソータくんたちにお願いしましょう。よかったです、ずっと失敗続きで困っていたんですね。ミルドさんたちには他の依頼を準備するので――」

「お、おい！ ちょっと待て!!」

エリさんが別の依頼を用意しようとする、ミルドが慌てた様子で口を挟んだ。

「はい？ 何か？」

エリさんがきょとんと首を傾げていると、ミルドはまたカウンターをバンバンと叩く。

「何か？ じゃねーだろ！ 俺たちが前衛のせいで失敗した依頼だろ？ なんでそれを無能集団が達成できると思ってるんだよ！」

「あつ……あははっ」

エリさんは思わずそんな声を漏らすと、気まずそうに頬を掻いた。

彼女がそのまま何も言わずにいると、ケルが当たり前というような口調で続けた。

「なぜ分かん。貴様らよりも我らの方が強いと判断したからだろう」

「おいおい、馬鹿言ってるじゃねーぞ。そんなことあるわけ……」

ミルドがちらりと目を向けると、エリさんは気まずそうに視線を逸らした。

その反応を見たミルドは、ますます苛立ちを募らせてピキピキと青筋を立てる。

ケルはミルドが怒っているのを確認してから、考えたふりをする。

「ふむ。となると……我らがこの依頼を達成すれば、貴様らは冒険者一人分の力もない魔法使いということになるのか……」

ケルは俺たちとギークをちらりと見てから、言葉が続ける。

「面白そう。ソータよ、早くこの依頼を受けてしまおう」

そう言ってるケルが依頼書に前足を置こうとしたとき——ミルドがその書類を奪い取った。

「おい、待てよ。犬っころ」

ミルドはこちらを向いて不敵な笑みを浮かべる。

「ここまで馬鹿にされたのは初めてだ。それなら、どっちがこの依頼を早く達成できるか勝負といくか？」

その言葉を聞いたケルは、あからさまに嬉しそうに尻尾をぶんぶん振った。畏にかかった獲物を前にして、心から喜んでるようだ。

……ケル、凄く生き生きとしている。

「——ちょ、ちょっと、待ってください！ さすがに実力差がありすぎますよ！」

勝手に話が進んでいく流れを、エリさんが慌てた様子で止めに入った。

冒険者ギルドの職員としての立場があるのだろう。

俺たちの力を知っている身としては、止めざるを得ないらしい。

「実力差？ さっきまで俺たちの方が弱いか言ってたくせに、急に焦ってどうしたんだ？
を売ってきたのはこいつらだ。実力差があっても関係ないだろ？」

ミルドは勝ち誇ったようにそう言ってる、得意げに笑った。

俺は一瞬、彼が余裕の表情をしている理由が分からなかった。

喧嘩

ん？ もしかして、自分たちの方が強いと思ひ込んでる？

エリさんに心配されているのが、俺たちの方だと思っているのかも。

エリさんもミルドの勘違いに気づいたようで頭を抱えている。正直に言ったら逆ギレされると思つて、伝え方に悩んでいるのだろう。

「えっと、あれです。えーと、そう！ ミルドさんたちは何度もこの依頼を失敗していますよね？ 相性もありますから、やめておいた方がいいのでは？ それに、また失敗したら――」

「はあ？ あんたたちがまともな前衛を用意しないせいで失敗したんでしょ？ 私たちはどんな魔物相手でも勝てるんですけど？」

「まったく。まともな前衛を入れれば、俺たちに達成できない依頼ではない。お前らの落ち度を棚に上げて、失敗の責任をこっちに押し付けるなんて、頭が悪すぎるぞ」

エリさんの気遣いもむなしく、ランとギークは鼻で笑う。

ミルドまでもそれに参加し、なぜかエリさんを馬鹿にしはじめた。

徐々にエリさんの営業スマイルが引きつっていき……やがて彼女は吹っ切れたように顔を上げた。「そうですか、それなら分かりました。対決という形にしましょう」

最後にエリさんが抑揚のない口調でそう言うと、ミルドは腕を組んで偉そうにため息を漏らした。

「当たり前だ。いつまでもグダグダしやがって、これだから低能は困る」

ミルドはそんな言葉を残して、ランとギークと共に冒険者ギルドを後にした。

「……忠告はしましたからね」

エリさんはミルドたちが出ていった扉を睨んでから、俺たちの方を向く。

「ゾータくん、サラさん、ケルさん！ あんな人たちに負けないでくださいね!!」

エリさんはずっと前のめりになって、両手で俺の拳を強く握った。

力強すぎるエールを受けて、俺は頷く。

パーティメンバーのサラさんや、お世話になっているエリさんを馬鹿にされて、黙っているわけにはいかない。

意気込む俺に应えてサラさんとケルも力強く頷いた。

こうして、俺たちと『魔導士の集い』の戦いが幕を開けたのだった。



数時間後、『魔導士の集い』の三人は、宿の食事処で夕食をとっていた。

「まさか、あの時代遅れがまだ冒険者をしていたとはな。いや、あれを冒険者と呼んでいいのかわからないが」

ミルドはフォークを肉に突き刺して、ニヤツと笑みを浮かべた。

三人は冒険者ギルドでのやり取りを思い出して嘖き出した。

「子守りをして自信でもつけたのかしらね？ ミルドの支援魔法がなければ何もできないくせにね」

「まったくだ。あいつが調子に乗るから、子犬とガキも調子に乗るのだ」

ランとギークはそう言っていると、酒の入ったグラスを傾けた。

しかし、彼らは気づいていない。

ミルドの支援魔法が凄いわけではなく、サラの前衛としての能力が高かったおかげで、短期間のうちにC級パーティになったということに。

彼らは魔法が使えない純剣士であるサラを完全に侮っていた。一般的にも純剣士は馬鹿にされがちだが、それにしてもミルドたちの偏った思考は大概である。

それは、彼らが魔法使いを高貴な存在だと思い込んでいることが原因だった。

魔法使いは大きく二つに分けられる。

一つは冒険者として魔法を使って魔物たちと戦う者。

もう一つは生涯を通して魔法の研究を行う者だ。

『魔導師の集い』の三人は後者の魔法使いだった。

一般的に高学歴と言われている魔法学校に在学しながら、とある理由で冒険者をしている彼らは、魔法の知識がない者は自分よりも下の存在であるという認識を持っていた。

「それにしても、今回の前衛もハズレだったな。なんで俺の支援魔法を受けて、サラ以下の働きし

かできないんだ」

「マジで前衛のレベル低すぎでしょ。どうして魔法が使えるのに、純剣士以下の動きしかできないかな」

ミルドとランは今日の依頼のことを思い出して、大きなため息を吐いた。

今日彼らの前衛を務めたのは、他のC級パーティで前衛をしていた者だった。

実力的に問題がある人物ではなかったのだが、全く機能しない後衛のミルドたちを守りながら戦うとなると荷が重すぎる。結局彼らは目的の魔物までたどり着くこともできず、途中で引き返す羽目になったのだった。

「その前の前衛も外れだったな。やはり前衛職に期待などすべきではないな」

ギークはそう言っていると、腕を組んで眉をひそめる。

サラが抜けてから、彼らのパーティには二度新しい前衛が加わった。

しかし二人ともミルドたちの壊滅的な実力と、酷すぎる扱いに嫌気が差して、パーティを去っていった。

普通なら二度も前衛に出ていければ、自分たちに問題があると気づくものだが、彼らには全くその様子がない。それだけ周りが見えておらず、自分たちこそが正しいという思い込みに囚われていたのだった。

「ねえ、ミルド。この街にまともな前衛職なんていないじゃん。勝負のときの前衛はどつすんの？」

ランの言葉を聞いて、ミルドは得意げな表情を浮かべる。

「それは問題ない。冒険者ギルドには最低でもB級。パーティの前衛を用意しろと言っておいた」

「おお、さすがだな。ミルド」

ギークに褒められて、ミルドはドヤ顔でグラスを揺らす。

「当たり前だ。前衛に足を引っ張られて勝負に負けるなんて、馬鹿らしいだろ？ 本来の俺たちの力を発揮できれば、あんな依頼は簡単に達成できるのだからな」

ランとギークは大きく頷いて、ミルドに同意する。

「調子に乗ってるサラに自分の立場を教えてあげないとね」

「俺たちを馬鹿にしてきた子犬とガキと一緒にな」

二人の言葉を聞いて、ミルドは満足げに口元を緩めた。

間違いだらけの話し合いだというのに、そこに誰もツツコむ者はいなかった。

こうして、残念すぎる魔法使いたちの食事は進んでいくのだった。

4 勝負開始

『魔導士の集い』との一悶着^{ひともちやう}から数日後——ついに勝負の日を迎えた。

ケルとサラさんと共に冒険者ギルドに向かうと、疲れきった顔をしたエリさんがいた。カウンターに向かうと、エリさんは俺たちに気づいて顔を上げる。

「あ、ソータくん。サラさん、ケルさんもこんにちは」

エリさんはすぐにいつもの営業スマイルを見せたが、いつもとは様子が違っていた。

「……さすがに、スルーはできないよね。」

「エリさん、何かあったんですか？」

サラさんがエリさんの顔を覗き込んだ。

「まあ、色々ありまして」

エリさんは気まずそうに笑うと、ため息まじりに続ける。

「ソータくんとミルドさんたちの勝負が決まったあの少し後、ミルドさんが冒険者ギルドに戻ってきたんですよ」

「ミルドが？」

「はい。『最低でもB級パーティの前衛を用意しろ』と言ってきまして。それに該当する冒険者を探すのが大変だったんです」

それを聞いて、俺とサラさんは目を丸くした。

確かミルドたちって、C級のパーティじゃなかったっけ？

「B級以上ですか？ C級の前衛ではなく？」

俺が思わず聞くと、エリさんは「そうなんですよ」と言って目を細める。

「ミルドさん曰く、自分たちはB級パーティの力があるから、それ以下の前衛は足手まといになってバランスが悪いとか言ってるんです。もう普通じゃないですよ」

エリさんがうな垂れていると、冒険者ギルドの奥からギルド長のハンスさんがやってきた。

「まさか、俺がいないうちにそんなことになっていたとはな」

ハンスさんは頭を掻いてから眉をひそめる。

「まあ、今回の勝負は都合がいいかもしれない。あいつらの言動は色々と問題だらけだったからな。一度痛い目を見た方がいい」

「問題ですか？」

俺が首を傾げると、ハンスさんは続ける。

「自分の実力を分かっていない。前衛や、学歴が自分よりも下の奴らを馬鹿にする。そんな奴らだ

から、他の冒険者たちから不満や苦情が多数寄せられているんだ。とはいえ、悪事を働いたわけではないからな……ギルドとしてはなんと……」

「そんな人たちのパーティで前衛をしてくれる冒険者なんて、ほとんどいなかったんですよ。本当に骨が折れました」

エリさんがそう言うと、ハンスさんは同情するように苦笑した。

そんな二人のやり取りを見ていたサラさんが、深く頭を下げる。

「申し訳ない、エリさん。私たちがこんな勝負をしなければ——」

「謝らないでください、サラさん……その代わり、ぼこぼこにしてやってくださいね！」

エリさんは笑顔でそう言うと、サラさんに向けて拳をぴつと突き出した。

突然のことに驚きながらも、サラさんは照れくさそうにエリと拳を合わせた。

そのやり取りを見ていたハンスさんは、何事かをエリさんに耳打ちする。

「エリ。あのことはミルドたちに言っておくだろうか？」

「もちろんです。ちゃんと言っておきましたよ」

それを聞いてハンスさんは、納得した様子で「それならいいか」と呟いた。

一体なんのことだろうか？

俺がサラさんと顔を見合わせていると、勢いよく冒険者ギルドの扉が開かれた。

その扉の先には『魔導士の集い』の三人の姿があった。